

図 8：神経症的主体における四つのディスクール（2）

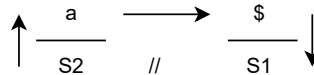
from #8.2

#8.4

分離が始まる瞬間
（＝エディプス第二の時）に
対応するのが、

右の「分析家のディスクール」である。

- ・主体は既存のシニフィアンの体系（=S2）に
同一化している
 - ・シニフィアンの体系には非一貫性があり、
予測誤差としての残余aが生じる
 - ・残余aは主体（=\$）を作動させ、
主体は革新的な視点（=S1）を得る
 - ・新たな視点は
既存のシニフィアンの体系と調和せず（=S2//S1）、
シニフィアンの体系を組みかえはじめる
- このディスクールは不安定であり、
速やかに下記の「主人のディスクール」へと移行する。

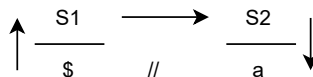


#8.5

父性隠喩を確立する段階

（＝「エディプス第三の時」）に対応するのが、
右の主人のディスクールである。

- ・主体（=\$）は
新たな根拠となるシニフィアン（=S1）を生み出す
- ・新たな根拠に基づいて
様々な命題が生み出されていく（=S1→S2）
- ・しかし、そうして構築された新たなシニフィアンの体系にも
非一貫性（=a）がある
- ・この非一貫性は、このディスクールで最初に欲望の主体が
解消しようとしたものとは異なる新たな残余aである
- ・生み出された残余aと主体との間には断絶があるが（=\$//a）、
主体はこの断絶が克服されうるものなのだという
幻想を信じている（=\$◇a）



to
#8.6
&8.7